
お寺でハロウィン

海野真水

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お寺でハロウィン

【Nコード】

N60290

【作者名】

海野真水

【あらすじ】

お寺の息子の空斗は、オカルト研究会のメンバーと自分ちで肝試しをする事に。でもただの肝試しでなくなって……?!

制服が冬仕様になってから、ひと月が経とうとしてた。

いつものように玄関を出ると、日中はまだ陽射しは暖かいというより暑いという方がしっくりくるレベルだ。

まだまだ暑いのに上着着るのかあ……。異常気象なんだから10月はどっちでもいいっていう事にして欲しいぜ。手に持ってたら邪魔で仕方ない。かといって、前みたいにバッグに放り込んでしわくちゃにしようものならオカンに「嫌がらせ」をさせられるからなあ。その「嫌がらせ」というのは、弁当を幼稚園児だったら狂喜乱舞するような「デコ弁」にされる事だ。しかも俺の好物ばかりを思いやがるから、絶対食わねえ！という抵抗は俺の腹の虫が許してくれる訳がなくて。

ここの高校に入学してから初めてこの嫌がらせをされた時には、ツレに大ウケされ、女子には携帯で写真を撮られまくったりで皆さんの1日だった。この日から、「デコ弁 空斗ちゃん」と言う全く嬉しくもない二つ名がついてしまった。

「空斗っ！ おはよ！」

学校までの道程をのろのろと歩く俺の後ろから軽快に走ってきて声をかけてきたヤツがいる。

朝からハイテンションなこいつは俺の幼馴染の真彩。

生まれた病院も一緒に、新生児室では隣同士にしないとかなかなか泣き止まなかったという、嘘か本当か分からない昔話を親から事ある毎に聞かされていた。まさか高校まで一緒になるとはな。

「ね、そろそろ今月のオカ研の活動しない？ 悠樹と隆宏からも、

聞いてくれて言われたんだ」

俺はオカ研……オカルト研究会の会長をやらされている。4人だけしかないから、同好会なんだけど。

「あ、すっかり忘れてた。それに何も考えてねえ」

俺の起動スイッチはまだ入ったばかりなので、思考回路がまだ十分に作動していない。

「もうっ。あいかわらず朝はダメダメでダルダルなのね」

真彩は呆れ顔で少しふくれたが、すぐにニツと笑った。

「でも、そう言うと思ったから私考えたんだけど、『肝試し』はどうかなあって」

俺はなんとなく嫌な予感がした。

「もしかして……それを俺んちでやる、っ事？　しかもこの時期に？」

「ピンポーン♪　だって、今年の夏は夜も暑くて結局肝試しはしなかったじゃない？　空斗んちなら他の人に迷惑もかかる訳ないしねっ」

悪気はない発言だけに、性質たちが悪い。

「あのなあ……　じゃあ俺んちには迷惑かかってもいいってか？」

俺がげんなりして言うのと、真彩は首を横に振った。

「そんなんじゃないよ。だって、空斗のお婆さん、いつでも遊びに来てねって言うてくれてるよね？　だったら問題ないと思うけどな」

「でも夜だぜ？　お前んちのオカンが止めとけて言うに決まってる」

「それは大丈夫っ。　うちの母さんと空斗んちのお母さんも幼馴染だから。信頼度100パーセントだよっ！」

……全く。こいつと言い合いで勝った事はなく、今回の事案も真彩の言いなりになっという方が無難だ。

「じゃあないな。それじゃあ、真彩はいつがいいんだ？」

白旗を揚げた俺の言葉を待っていたかのように、真彩は目を輝かせた。

「もちろん、今月の月末。ちょうどハロウィンでしょ？　うってつけだと思わない？　時間は19時に空斗んちに集合って事で」

「ハロウィンに肝試しなんて聞いた事ねえし。それにもうあさって

じゃないかよ……。ったくもう、仕方ねえな。とりあえず今日学校で話しとく。忘れていなければ」

適当な感じで流そうとしたら、真彩が俺の正面に真顔で回りこんだ。

「絶っ対忘れないでよ？ でないと空斗の二つ名が、また増える事になるかもよ？」

……。そうだった。こいつには弱みを無数に握られているんだった。俺って、何故かこいつの前では無防備になるんだ。

「分かったよ。会ったらすぐに言っとく」

「よろしい」

真彩はにんまりとして、鼻歌を歌いながら俺の前を歩いていった。

俺は家の外門に出た。10月も終わりになるともう結構夜は冷える。門の上についている白熱灯を頼りに時計をみるともうすぐ8時。そろそろオカルト研究のメンツが集まる頃だ。

「空斗っ、来たよ」

時間と同時に真っ先に着いたのはでかいリュックを背負った真彩だった。

「おまえ、何持ってきたの？」

「だってハロウィンでしょ？ おかしがいっぱい入ってんの。後でみんなで食べようね」

うきうきした声で後ろを向いてわざわざパンパンになったリュックを俺にむけた。こいつはまだまだおこちゃまだ。

はしゃぐ真彩の背後から、カランコロンと現代に似つかわしくない音がしてきた。

「あいつがきたな」

俺は暗闇に目を凝らした。

「ういーっす。久しぶりの肝試し、楽しみだな。今度こそ妖怪に目にかかりたいもんだぜ」

やってきたのは年代物の下駄を履いた自他共に認める妖怪マニアの悠樹だ。日本の妖怪のみならず、外国の妖怪……というかモンスターまで幅広く網羅しているんだ。幽霊にも興味はあって、一度生で見てみたいと切に思っているらしい。

「もうみんな集まっているのか。意外と早かったな」
最後にやってきたのは隆宏。

こいつは妖怪や幽霊なんてこの世には存在しないと信じて疑っていない。オカ研に入ったのだって、妖怪や幽霊がない事を証明する為だとか。

「よし、みんな揃ったな。んじゃ行くとするか」

俺が声を掛けると、3人は懷中電灯で下から自分の顔をライトアップしながら答えた。

「おっけー」

俺んちの庭は、寺の境内でもあるのでほとんどが墓地だったりする。

外門から玄関までのじゃり道沿い……といっても50メートルくらいあるんだけど、墓石がずらーっと並んでいる。

夜になると、結構真っ暗で、途中にポツンとある灯りも切れかけてるのかチカチカしている。

自分ちだとは言ってもここはあんまりずっと居たい場所ではない。今は玄関の灯りがついてるからまだいいけど、真っ暗だとちょっと引いてしまう。特に学校で怪談話をした日とかは。

俺たちが肝試しに行くのは、道からずっと左奥の墓地のはずれある慰霊碑のところ。主に無縁仏を祀ってあり墓地から少し離れた所にあるし、その向こうは川と林に囲まれているので本当に真っ暗だ。

しかも行く手には最近親父もおかんも法事やら葬式が立て続けにあって、慰霊碑の方まで手入れが行き届かないらしく俺の背丈ほどの草が生い茂っている。

草刈を業者に頼んでも、何かしらの理由がついてキャンセルされたりしている。昔はこの辺りに土葬もしていたらしいから、何かいわくつきのなニオイを感じるのは俺だけだろうか？

「それじゃ、ひとりずつこの白菊を持って。順番に慰霊碑に置いて帰ってくる事っていいな？　ちゃんとお参りするんだぞ。石畳の一本道だかけど草で見えにくくなっているから道からはずれるなよ」

「よし、とりあえずトップは俺だな、っと。行ってくるぜ」

「気をつけていけよ」

「りょーかいっ」

悠樹は妖怪を題材にしたお気に入りのアニメの主題歌を口ずさみながら暗闇に消えていった。

下駄の音が遠ざかってから、もう30分になろうとしていた。

「ねえ空斗。いくらなんでも遅いんじゃない？」

真彩が不安そうに俺に言った。

いつもなら5分ちよつとで帰ってくるんだけど、今日は遅すぎる。

「危なそうなところは無いはずだけどなあ。強いて言えば昔の土葬の跡が陥没した穴があればだけど。今までなかっただろ？」

「石畳から外れなければ、だけどな。あいつほんのちよつとの距離で迷えるスーパーウルトラ方向オンチだから」

隆宏がさらっと毒舌を吐いた。ていうか、この距離で方向オンチなんてありえないだろ！

「とりあえず、俺が見てくる」

俺は懐中電灯がつくか確認して、慰霊碑の方へ向かった。

慰霊碑に向かうにつれ、だんだん草が生い茂ってきて、前を照らしても慰霊碑は見えない。

「悠樹！ いるかあ！」

俺は途中で立ち止まって叫んでみたけど、辺りは静かで返事はなし。奥からかすかに聞こえる川の流れが人気のなさを演出しているような気がする。

さすがに俺も不安になって、後ろを振り返ってみると、うちの灯りが草にまだ見え隠れしているのでちよつとほつとした。

その「ほ」がいけなかったんだろう。

いきなり目の前で草がガサガサッ！と揺れて、俺は声もなくその場で腰を抜かした。

草の間からぬつと顔を出したのは悠樹だった。

でもその顔は真っ青で、手の懐中電灯は消えていた。

俺は悠樹の様子を見て、何かただならない物を感じた。

「大丈夫か？」

俺の掛けた声で、悠樹は我に返ったようだ。

「おっ……奥に誰がいるんだ！ 何人かでしゃべっているみたいなんだ」

悠樹は珍しく慌てている。

「そんなはずない。うち、外門の鍵はついさっき開けたばかりだし。塀があるし林の向こうは川の流れがあるから誰も入れないはずだ」

俺は悠樹の言ってる事がどうにも信じられなかった。

「俺、見てくる。時期住職として不審者をほっとく訳にはいかないからな。お前は戻って、あとのふたりに待ってるように言っというて俺は気を取り直して懷中電灯を握りしめると、奥へ向かった。

「何かあったら叫べよ！」

悠樹が心配そうに声を掛けてくれた。

「分かった」

少し奥へ行くと、ぼそぼそと話声が聞こえてきた。

やっぱり、誰かいる。しかもひとりじゃない。

実際は、お化けよりも不審者の方がちよつと怖いかも。

お化けはいても不思議じゃないけど、不審者がここに居る事はありえない。人間だから、何をしてくるか分からないし。

でも姿を目視で確認したくて一歩踏み出した時。足元でカラン、と何か乾いた物が転がった音がした。

木かな、と思って足元を照らす。

灯りに浮かび上がったのは……一本の骨だった。

これはたぶん、上腕骨だな……ってなんで冷静に見てるんだ俺！こんなところに骨なんて……こっちはありえなくもない。

この辺もひと昔前までは土葬してたから、動物が入り込んで掘り返したのかも。たぬきがいるの見た事があるから、川を渡って動物が入ってくるのは実証済。

うーん、どうしたもんか。

とりあえず戻って、親父にこれ見せて、不法に侵入したヤツがい

ると警察に連絡してもらおうか。

手近に桐の木があったので葉っぱを一枚ちぎって骨をくるんだ。
そして戻ろうとした、その時だった……！

暗闇の中、俺たちが行こうとしている方向の草が揺れているような気がした。

誰か、いる?!

どきどきしながら懐中電灯を俺たちの前の方から、草がガサガサかき分けられて誰かがこっちへ向かって来るのがはっきりと分かった。

やべ! 見つかった?!

っていうか、これじゃまるで焦ってる俺の方が不審者だ。

またさらに大きく、草がガサガサッと揺れたのと同時に、不審者(?)がぬっと俺たちの前に顔を突き出した!

ヤバイ! 見つかった?! 思わず、ぎゅっと目をつぶったんだけど、相手は何もしてくる気配はない。こうなったら、開き直ってにらみつけてやる! そう心に決めて思い切って目を開いた時……!

……それは人相の悪いおっさんでもなく、かといって綺麗なお姉さんでもなかった。一応人間の部類にははいつて『いた』んだろうと思われるもの。それが俺の目には映っていた。

理科室の標本そのものの、頭蓋骨が、空洞のはずの目のとこに? マークが見えてるように首をかしげて俺たちを見つめて? いた。

「ぎゃあああああっ!」

声の限り絶叫する俺と隆宏と悠樹。

「ひよええええっ!」

素っ頓狂な声をだしたのはガイコツさん。

「きや~~~~っ!」

どっかのアイドルのファンが叫ぶような声……真彩だ。っていうか、いつの間に側まで来てたんだ?! それぞれが、それぞれに悲鳴をあげて腰を抜かしてその場にへたりこんだんだ。約1名を除い

て。

「骨だわっ！ この洗練された白さっ！ すべすべの手触りっ！
しなやかな曲線を描くフォルム！ もうなんて完璧なのっ！ 理
科室のレプリカなんて遠く及ばないわっ！」

いつの間にか、ガイコツのそばにとんできて、何度も頬ずりして
るのは、自称『ホネフェチ』の真彩だった。

くつつかれたガイコツは、なんか固まってるようだ。……無理も
ないよな。

「ま、真彩？ 平気なのか？」

気を取り直した俺は、真彩とガイコツを見比べた。

「やあね、こんな素敵なガイコツさんが何か悪さをするように見え
る？」

いや、俺にはお化けガイコツにはしか見えないけど……と言いたい
とこだけど、ホネフェチ真彩の耳には入らないだろう。

がつくりうなだれて、脱力してた俺は、無意識に持ってた骨を、
ポロッと落とした。「あ！ これや！ わての腕！ なんやこんな
とこにあったんかあ。どこ探しても見つからへんはずやわ。おおき
にい」

硬直から解けたガイコツは、とても嬉々としてその骨を腕の位置
に何事もなかったようにくつつけて、ぐるぐる回してみせた。

「……あんた、もしかしてお化け？」

「お化け……なあ。ま、そんなもんなんやろけどなあ」

つるつとした頭を、これまた骨だけの指でポリポリ掻きながら言
った。

表情があつたら、きっと苦笑いしてるだろうと想像できるしゃべ
り方だ。

「この姿はなあ、霊力で実体化させたもんなんや。結構苦労したん
やで。拾うてもうた、その骨もほんまもと変わらへんでっしやろ
？」

今度はちよつと得意気に胸を張った。

「ま、靈魂でおる方が楽なんやけどな、最近仲間になったヤツが、今日はなんや外国は『はろういん』とかいう祭りやってゆうから、わてらもマネしよかって事になってん。日本の盆は辛氣臭いで、あっちの方がよっぽとおもろそうやろ？」

「ははは……。まあね」

それにしてもよくしゃべるガイコツだ。まるで関西のお笑い芸人みたいなヤツ。骨だけでどうやってしゃべるのかは謎だけど、突っ込むだけ無駄のような気がする。

「そや！ なんやったたらあんさんらもわてらと一緒に『はろういんぱーてー』やらへんか？ ここで逢うたのもなんかの縁や。久しぶりに生きた人間さんとしゃべりたいしなあ」

「『わてら』……っていう事は、他にも仲間さんがいるとか？」

悠樹が目をキラキラさせてガイコツに聞いた。妖怪マニアのスイッチが完全にオンになったようだ。

「おるで。まあこっちに来いや。他のヤツらに紹介したるさかい」なんて感じで、お氣樂に誘われてしまった。

真彩は行く氣満々で、まだ腕の骨にすりすりしている。

「んー、もう手放したくないわ！ このガイコツさん」

うっとりした表情で真彩は呟くと、表情のないはずのガイコツの目の所が、でれっとしたように見えた。

「ひやははは。死んでから初めてモテたわあ」

「……俺は帰る」

そう言って、くるっと背中を向けた隆宏を、悠樹が腕をつかんで引き止めた。

「まあまあ、そんな事言わないでさあ。こいつらがほんとに幽霊なのかを確かめるチャンスじゃん？ それになんか楽しそうじゃん。ほれ、お前も」

悠樹はすっかり脱力してしまっていた俺の腕も引っ張った。

そしてさっさと歩き出したガイコツと真彩の後を追って、俺たちを強引に引きずるようにして自分も歩きだした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6029o/>

お寺でハロウィン

2011年10月22日21時19分発行